

● 森永砒素ミルク闘争二十年史

運動編

第一運動編章 守る会・光を求めて二十年

岡崎 幸子 森永ミルク中毒の子どもを守る会岡山北支部長
守る会・光を求めて二十年

(序―暗い夜明けに贈る) 毒を盛って人を殺せば死刑になる。これが世の常の道である。しかるに、罪なき百二十八の幼い魂を奪い、一万二千人の乳児を傷つけ、人類史にその例を絶する大毒殺事件を引き起こした森永乳業は、驚くなかれ、無罪になろうというのだ。

しかも今日、数百人のいたいな赤ちゃんが終生の不具者に還命づけられんとし、会社はこれを闇に葬らんとしている。

暗き夜には、政府も新聞も、医者も弁護士も、検察官も法廷も、こぞって大資本の前に叩頭するのかも知れない。

だが、歴史は欺かれないし、買収もされない。『我々が刀折れ矢尽きて斃れても、森永は永き世の末までも罪名を拭われない』と被災者は叫んだ。大資本の暴虐に泣く者の涙はもう私達の子が最後でありたいと念じ、永き世の人々が私達の運命を過去の悪夢と観ずる日の必らず来ることを信じつつ、私達の血を魂を捧げて歴史の審きに委ねんために、この書は綴られた。

―昭和三十二年八月二十四日の事件二周忌に出版された「森永ミルク事件史」初版(再版は昭和四十八年八月十日、「砒素ミルクⅡ」として刊行された)の序文である。

被災者同盟が惨敗し、岡山同盟の一部の人は訴訟に走り、残され

た人達が止むに止まれぬ思いで「岡山県森永ミルク中毒の子どもを守る会」を結成したが、昭和三十一年六月二十四日であった。

被災者同盟と全国協議会の指導に当たった多くの役員が、失職の憂き目を見る中で、私の家業の小さな店も傾き、通院の必要な娘を抱えて生活に追われる最悪の事態が私達を見舞った。しかし、それにもかかわらず、憑かれたように事件史の筆を進める主人の姿は異様であった。

「事件史だけは絶対に書き残す必要がある。でないと、社会正義は全うされない」――そう言われると、私には返す言葉がなかった。

事件史がその数年後に、古書店の店頭で能瀬英太郎氏に買いとられ同氏が、守る会のこよなき支援者になられたこと。また、徳島検察庁から大量注文をうけて、刑事裁判無罪の判決を最終的にくつがえすに至った検察の努力に若干の貢献をしたこと。また、丸山報告までの十四年間に、約一千冊が全国各方面に配布されて、有識者の絶え間ない理解と関心を惹起する導火線となったこと。そして、丸山報告の時点で、マスコミのひっぱり尻になり、「砒素ミルクⅡ」において再刊され、今回の二十年史の刊行につながったこと。――一体、主人は、その時、歴史が今日に至ることを本当に信じ、見透し

ていたのだろうか？　しかし、事件史の序文は、明日の光明を信じる予言者のように記されていた。

昭和三十年五月十日、長女ゆり子出産、「異常ありません。キレイな赤ちゃんです。」看護婦さんの言葉に、始めて母親になった感激の涙を流した私は、丈夫なかしこい娘に育てたい一心で、定期検診には毎度いそいそと出向いた。母乳不足で、レーベンスや明治ミルクを飲ませていたが、保健所で森永ミルクが良いとすすめられそれに替えた。

暫く順調だったが一か月半頃から吐乳、下痢症状がでて、病院に通ったが、森永ミルクなら絶対心配ないと云われ、食欲の無くなった娘に、薄めたり、濃くして量を少なくしたり、苦心惨胆して与えた。が次第に腹はふくれ、吐乳、下痢のくり返し、やせ、皮膚の各所が黒変、発熱、夜泣きで親子共々通院にヘトヘトになった。

七月下旬、四十度の高熱でひきつけが起き、日赤へ即刻入院。脳膜炎と診断され、絶望の三日目に熱が下がり、同じ様な患者が次々入院するのでベッドが足らぬからとすぐ退院を命ぜられた。脳膜炎の後遺症におびえる不安と悲しみの毎日であった。

八月二十四日、夕刊岡山で「ドライミルクの恐怖」の記事を見、二十五日各紙「森永ミルクのヒ素中毒」を發表、かけつけた日赤の前は、炎天の下乳児を抱いた母親の長蛇の列、混雑した小児科の診断結果は、「中毒症です。ベッドが足りぬから重症者の入院を優先し、市内の人は通院して下さい」といわれて、つい先日脳膜炎といわれ入院した事を訴えても通院せよの一点ばり。親達がささやく「砒素中毒解毒のバル注射を重症者は夜も打つぞうだ。バルは高価で毎日千円位かかる」等々、聞いた事を電話で報告し終らぬ内に、主人から、「砒素中毒は、石見銀山鉱毒と同じ重金属で、後遺症が残る心配がある。入院料も一切森永が負担して完全に治療すべき

だ。完全に治し、後に何も問題が残らぬようにすることは、むしろ森永にとってもよいことではないか。それには、親が団結してその様に事を運ばねばならん。安心して入院せよ。今、新聞に声明書を出すことと、署名運動の案をねっている。病院内の署名運動を頼む。通院せよと云われても絶対入院せよ。帰ってくるな。」といわれた。

私は、「署名は任して。お店を頼む。頑張って！」と電話を切ると通りがかった看護婦に砒素中毒患者の病棟を聞き、娘と荷物をかかえ足の向くまま行きついたので二階二十七号室。手前の廊下から待合用の長椅子二本を引張り込み、ベッドを作りそのまま入院患者となった。混雑で通院患者とも知らぬ看護婦さんは、長椅子で気の毒だと布団を余分に運んで下さり、いつの間にかカルテも出来、注射も打って下さり、先生の回診も皆と同様であった。同室の方に「心配で勝手に入院した。よろしくお願いします。」と頼むと「よく来られた」と皆親切であった。

私は今になって思う。あの時医者の指示通り通院して充分な手当が受けられなかったら……と。現在被害者の中で当時の重症者が行き届いた治療で今は軽く、当時の中・軽症者の治療がずさんで後遺症の重い人がある。

主人の「強引に入院せよ。絶対帰るな！」の電話はすでにこの事件の本質を見通し、娘を重い後遺症から救ってくれた。私も娘も主人のこの一声に心から感謝している。

二十七号室には、高熱でうなされ、耳だれを流し、泣く力もない黒い赤ちゃん達が横たわり、バル注射の都度あえぐように泣き、その哀れさに親達は怒りを爆発させた。

「バルや抗生物質の注射で赤ん坊が完全に良くなるのか。家業は出来ぬし治療費は一体どうなるのか。森永は謝りにも来ないではないか」

私は西崎訂敬氏他数人の父母と夜を語り明かした。「被災者が団結して森永に責任をとらせよう。先ず日赤の入・通院患者の署名運動から始めるのだ」と夜明けに決意した私達は趣意書と署名簿の作製を主人に頼み、署名運動は私と二、三人でし、赤ちゃんは同室の母親が交替で看病する事に決めた。

主人が精魂こめて書いた人道主義の思想と要求で貫かれた「森永ドライミルクに依る被災家族中毒対策同盟趣意書」は、行政当局、県下の各大病院に宛て発送され、日赤の私達は重症棟の一階から二階三階へと走り、大講堂では、私はいつの間にか演壇の上に立っていたが、訴え終る間もなく親達は「賛成だ！」と叫び中年の夫人が「ここは引き受けた。頑張りましょう」と進み出た。

三階の廊下に我が子を入院させていた歯科医師の平田孝雄氏は「実は私も我慢出来ない気持ちでいたが趣意書を読んで感激し、決心した。徹底的に闘いましょう」と申し入れて来た。署名し乍ら親達は、毒ミルクと知らずにのませた怒りを、悲しみを、私にぶちまけた。

通院患者も我先きに署名、病院内はアツという間に団結した。私達は一般患者にも訴える為病院内に趣意書をはって回った。

「被災家族同盟結成さる」のニュースは新聞・ラジオを通じて翌日全国に報道された。

日赤の事務長は壁新聞をはられ同盟への電話連絡や客で迷惑だと文句を云って来たが「赤ん坊を救う為もっと協力してほしい」と抗議し、趣意書をはがされると夜に張り直し、夜更けの廊下を静かに走って廻った。看護婦さんは同情して見て見ぬ振りで、注射を打ちに来る度に激励してくれ、子供をよく看病して下さった。二十七号室は、各新聞記者・来訪者の出入りが繁く本部のようになったが、そこへ森永乳業岡山営業所の社員が私を尋ねて訪れ、ドアをあけて入るや同室の親達は「毒ミルクをのまして今頃何をしに来た。死に

そうな子供をどうしてくれる！」と叫び、おしめを丸めて投げつける人もいて、社員は驚きの余りろくに話もせずに逃げ帰った。

日赤を皮切りに大病院をはじめ各病院は次々と団結、総決起大会、同盟結成。主人が初代委員長となり、全国協議会の発足、北村雅俊氏・黒川克己氏等と共に交渉交渉と必死の活動に入った。

色素沈着等の症状も完全には消えぬ九月上旬に「バル注射も打つだけ打つたし重症者が次々入院を待っているから」の理由で強制退院を命ぜられた。長椅子のベッドから離れ、久し振りに帰った我が家と店は戸じまりがされ、うす暗かった。主人は被災者救済の同盟活動に飛び廻り、私は娘の通院に追われ、小さな化粧品店は「被災者同盟事務所」の看板がかかり、マスコミや被災者の出入りが多く「変な店」「アカの店」とイメージが変わり、お得意様からも見放され、努力の甲斐なくいつの間にか生活の支えを失っていた。主人は交渉・陳情・会議デモと飛び廻る他、事務局長としての文書活動でガリ切り、騰写版で莫大な印刷物の作成に、私もともに夜更けまで一枚一枚ザラ紙をめくってすり上げる闘いの毎日であった。

こうした必死の闘いも森永と厚生省と医者や権威者達の陰謀によって押しつぶされ、妥結案をもって同盟は解散。岡山の一部は訴訟に分かれ、解散反対の強硬派数人が、書類を強奪しに私宅へ押し入るといふ一件もあった。その後全国の被害者は散りぢりとなり、訴える場を失ってしまった。岡山の私達は、主人を中心に後遺症は必ず残るといふ確信を持ち、その解決を金を目当てとせず子供の健康管理の為に会社と交渉を続け、治療をかちとり、将来を見守り、親の責任を果たすため、昭和三十一年六月二十四日「岡山県森永ミルク中毒の子どもを守る会」を結成、会の本部を我が家に置いた。この日から守る会は、被災児の定期検診・治療・費用等について森永と交渉を続け、毎年八月二十四日には総会を開き親睦をはかり、活動し、子供の体を元に返すために努力をしようと誓い合って、小さ

な灯火をともし続けた。この年の七月一日には平和楼で中毒事件関係者懇親会を開いた。

八月二十四日は守る会第一回総会。岩月、吉房、浅野、上田、横田氏等は夫婦連れで、ミルクおしめの大荷物と、病気の子供をかかえて集まり、会場は超満員、病でむずかる赤ん坊が泣くのをあやし乍ら親達は、これからの子供の将来の為守る会を支え、頑張っってゆく事を何度も誓い合った。

聴診器を二・三度ポンポンと当て、腹を二・三回押えただけで「ハイ異常なし」と全決になった娘は、まだ額に色素沈着が残り元気がなく仲々立たずに寝ころんでいた。遅れて漸く歩き出し、皮膚もキレイになったが、こめかみの辺に小さな色素沈着を残したまま仲々消えない。女の子の将来にも影響する、何とか治してやりたいとたずねた大病院の小児科で、浜本教授は「今頃色素沈着が残った等と云って来る人は貴方だけだ。砒素中毒はみな治っておる。皮膚科廻しだ」。皮膚科では「生れつきのアザだ」と一蹴された私は森永と大病院のゆ着を肌で感じ、怒りと悲しみにふるえたものであった。

同盟解散と共に傾きかけた私の店は成り立たなくなり、パンと牛乳とバターであった朝食も子供を除いてはパンと水になった。主人は守る会の交渉に必要な文書作りでガリを切り、夜毎にペンを走らせ「森永ミルク事件史」を書いた。その後姿は無念と執念の固まりであった——事件史を書く事が闘いであった。私も事件史だけは残して欲しいと念じていたから生活の為に水商売で夜中まで立ち働くことも、保険の外交で歩くこともいとわなかった。

昭和三十二年八月二十四日事件史は刊行され、本を手にした時の感激は忘れられない。六月十八日に守る会は県衛生部に坐り込み要治療児全員の治療を森永に約束させ、八月二十四日守る会第二回定期総会。八月三十一日には守る会の交渉の結果かち得た検診を私は

倉敷中央病院で受け、岡大病院へ行くグループには主人や綱島氏等が付添った。主人は、会費のデータを常に文書にまとめ会社と交渉を重ね、治療費を出させたが、病気で入院治療をくり返す重症の子供達は苦しみの連続であった。

第三回定期総会・第四回定期総会には、綱島、岩月、吉房、上田、横田、浅野、の各氏らが集まり子供の日常生活・健康状態を報告、対策を練った。総会の日には会場である我が家のお床に掛軸の代りに、守る会のスローガン「森永よ、約束を守れ、誠意をもって後遺症患児を救え」「子供を元に返せ」の垂れ幕が張られた。

この頃は娘の体作りに一心になった。少々おくれたが正常に歩き出し、この機を逃さず体力をつける為子供の食事、栄養摂取に注意した。お八つも手作りで甘いものはさけた。年中風邪を引き気管支炎になるので体質改善の注射をつづけた。これだけではいけないと思い、朝夜は体中が真赤になるまで乾布マサツをした。この頃事情により現在の番町宅に移り主人は社会福祉協議会に勤務する身となった。動機は社協局長が森永ミルク事件史を読み感激、是非社協で活躍して欲しいと頼まれたからであった。私は新宅移転半年後に脳軟化で倒れた高齢の叔母を看病する立場となった。

娘には、体を鍛える為に主人と交代で行って旭川で泳がせ、秋風の立つ涼しい頃にも水の中に入れて体を鍛えた。保育園に通い出して明るい子になった。娘には、この頃から、砒素ミルクを飲んで赤ちゃんの時長く患ったから自分自身で自覚して鍛えるように教え込み、乾布マサツも自分で進んでするようになった。

娘には、我が家で聞かれる守る会の会合には、毎年参加させた。集まる親達や病気の重い子供達の悩みも聞かせ、森永ミルク事件を、親の活動を、自然に認識して行ってくれるようにした。

この頃森永本社の社員が守る会本部を訪れては、「砒素中毒患者はみな問題が無くなったのに、岡崎氏宅に集まる守る会会員だけは

後遺症があると訴える。思い過した。お嬢さんも立派に大きくなれた」等と世辞とも詭弁ともつかない言葉を弄しては後遺症をもみ消そうとしていた。また私宅だけでなく苦しみを訴える会員宅を訪問しては「先天性だ。他の患者はみな治っている」と砒素中毒抹殺に手を貸す御用医者と組んで説得につとめた。それ等の情報はみな会員の報告によって本部に集約された。

このようなやり方で昭和三十一年頃からマスコミは事件とは縁が切れ、被害者の苦しみは誰れにも知られなくなった。大病院の医師が先頭で後遺症は無いと宣伝する有様だった。その上岡山県衛生部は被害者を守らないで、森永の企業利益を守る方に力を入れた。

昭和三十五年一月十七日、守る会は臨時総会を開き、種々の情勢報告、活動の方針を討議した。そして、昭和三十五年五月七日岡山市都ホテルで森永代表磯部氏、松本氏と交渉して被害児の治療を行わせるべく約束させた。吉房亀子氏が子供の苦しみ、会社の不誠意を切々と、又机をたたいて訴え、森永社員が汗をふきふき答弁をする当時の写真が残っている。

その年の八月一日、岡山市立岡北中学で開かれた中国五県母親大会には、吉房、浅野両氏と私と三人で参加、子供の苦しむ現状、森永の不誠意を訴えた。

翌八月二日は守る会第五回総会。この総会の決定に基づいて、八月二十日、吉房氏夫妻、浅野氏、岩月氏等は、二十三日東京で開かれる第六回日本母親大会に出席して訴える為、また森永社長宅直訴、厚生大臣と面会、陳情、の大役を荷い、生米持参、野宿を覚悟で上京された。本部で行動計画を打ち合わせた時、上京する各氏は「子供の為なら東京駅に野宿しよう」と、生米かじろうと一向平気ですらあゝ。岡崎さんが居らなくても迷い子にやなりやあせん。行って来ますで」と親達は捨身の決意であった。出発後、主人は東京の知人「福祉新聞」の森鉄雄氏に上京組を頼むと電話連絡してお世話に

なった。森氏は当時広い東京で森永ミルク事件を理解されるたった一人の支援者であった。福祉新聞は守る会が母親大会で訴え、厚生省に陳情をした事、後遺症の訴え等を大きな記事にして報道した。

九月二十日、主人は十一頁に亘る、事件の歴史、検診データ、訴え等をタイプ印刷した。守る会発第二二五号の厚生大臣陳情書を作成、中山マサ厚生大臣に提出した。去る八月上京陳情の際、すぐ面会に応じ、親切に一時も話を聞いてくれ、記念写真までとった。中山厚生大臣からはその後陳情書について一片の回答も無かった。そして森永は、守る会の要求していた被害児の治療についての交渉を全面拒否して来た。(岡山県衛生部が秘密裏に、「被害者の苦情を適当に処理した」旨の報告書を厚生省に提出していたことが、後年判明した)

昭和三十六年一月十五日、守る会は臨時総会を開いた。出席者は岩月、吉房、浅野、綱島氏ら各夫妻と子供達、岡崎一家であった。苦しい上京をして母親大会に訴えても森永の圧力で世論は押えられ、厚生省は陳情に一言の回答もなく、権力の悪辣さに私達の怒りと悲しみは今後闘いを続ける決意をますます強くさせた。岩月氏はこぶしを握りしめ、

「わし等を田舎のどん百姓と思うて、厚生省や森永は馬鹿にしとるが、今に見ておれえ！ 恨みを晴らしてやるから。これから十年戦争でやるんじや、なあ岡崎さん！」吉房氏は、「そうじや。毒を入れたのは森永じゃけど、飲ましたのは私等やけん。一人前に元気になるまでは、親の責任を果した事にならん。頑張りましょうで！ 十年戦争絶対やりますで！」

それは森永の毒ミルクを知らずに飲ました親の悲痛な覚悟であった。娘が健康に育っていることに私は感謝した。それと共に立派に成人するのを見届けるまでは闘い抜くという皆の決意は、又私の決意でもあった。

訴えられるあらゆる所で訴えをつづける——というのが守る会の皆の決意であった。こうして、五月一日のメーデーには、県営グラウンドのメインスタンド二階に集合、守る会の旗をかかげ祭典に参加した。守る会の指導者は網島氏と主人とたった二人となり、活動に参加する会員は、極く少数の同じ顔ぶれであった。スタンドから見るかに見える岡山市街、山並み、青空の彼方の全国には、必ず多数の中毒児達が苦しんでいるに違いない。岡山守る会を知らないのだろうか？ 苦しみに負けて子供を救う活動をあきらめたのか？ 私達はスタンドで組織の無い為に苦しんでいるであろう子供達、親達の事に思いを馳せた。

そしてメーデー行進の中に入り、子供の手を引き、抱っこしながら団結のハチマキをしめて「子供を元に返せ」のプラカードをもって市巾を行進した。

また、十一月二日には、第九回子どもを守る文化会議に、岩月、吉房、網島の各氏と主人が参加、訴えを行なった。

昭和三十七年三月十七日は、守る会第六回総会。被害児達の小学校新入学祝賀会である。七年前には最重症の子供達ばかりだったが本部に寄りつどう親の子供達だけは、金にまどわされず、苦しい活動の中から得た治療のお陰で、皆人並みに小学校進学が出来た。前日に主人と私は、子供達の喜びそうな文房具のお祝いの贈物の用意をし、茶菓子もいつもよりはりこんだ。当日には、きれいにおすました子供達が親に手を引かれ喜んでやって来た。まだ病気の治療は必要だが兎に角苦しい入院を繰り返し、子も親と共に耐え努力したからこそ小学校へ行けるのだ。然し子供達の中には、歯の生えない子、皮膚の悪い子、眼の悪い子、まだまだこれからの闘病生活がある。総勢十七人、床の間を背景に主人が記念撮影し、一日を語り励まし合った。

昭和三十七年八月二十七日、守る会第七回総会の日、守る会の名

称から「岡山県」の文字を削り、以後全国単一組織として「森永ミルク中毒の子どもを守る会」と決定した。

主人が、「同じ苦しみを持つ者が、二人でも三人でも集まり語る事によって、一人で苦しみ絶望する事から救われる。そして生きる力と知恵が湧いてくる。どんな小さな組織でも、何一つ報われなくても、辛抱強く組織を守り、あきらめずに活動する。子供を救うのは、愛情から生れる闘いの力だけだ。私達は、岡山県の被害者だけでなく全国の被害者も共に闘うよう呼びかけよう。」と挨拶と提案をした。岩月氏は、「その通り。我々は裸で生れて来た。金も物も要らん。ただ子供を元に返してくればええのじゃ。全国だけじゃいけん。世界へ知らせにゃならん。極悪非人道の森永会社の毒ミルクを飲んだ子は、こんなに苦しんどるんですと！」とこぶしで畳を何度もたたき、汗を拭いた。私は、岩月氏の空になった湯呑み茶碗に何度も麦茶を入れ添えた。

十月、秋も終りの寒風の立つ頃、岩月、吉房、浅野、横田氏等は我が家に集まり、森永乳業岡山出張所前に座り込み、「森永よ！約束を守れ！砒素中毒の後遺症に誠意を示せ。」「子供の体を元に返せ」の一間の横幕を二枚張り、検診治療に誠意を示せの訴えのビラまきをした。あの大事件もすっかり忘れられ、経済高度成長時代のこの頃、訴えのビラまきは物珍らしく人を立ち止ませ、真剣に読んでくれたと四人は夕日の沈む頃本部へ帰って来た。

昭和三十六年十二月九日 脳軟化症で看病し続けた叔母が亡くなった。亡くなる二十日程前叔母は私に「ゆりちゃんも毒ミルクを飲んで貴方も大変だったろうけどあんなに大きくしっかり育って来た。この子の頭は大丈夫だよ。何時迄も心配しないでもう一人子供をお作り。私は一人娘を失って貴方方に随分お世話になって済まないと思ってる。貴方に子供を授かるよう祈っているよ。今度は男の子がいいね」といった。私は事件以来、後遺症におびえ生活の慌

しさに、子供を生む事に罪悪感と恐れすら感じていた。長い看病を果した事と叔母の残した言葉に心の安らぎを得た私は、翌年十月七年振りに長男を生んだ。長男の時はミルクに頼らず母乳を与えた。

昭和三十八年八月二十五日、第八回守る会総会には吉房氏が相変らず一番乗りでやって来た。総会では徳島の裁判判決がどう出るか何よりの関心事であった。然しこの頃は旧役員に呼びかけても返答なく、集会に参加する人もごくわずか、顔ぶれも決っていた。この年は岩月、吉房、浅野氏のみであった。集まる活動家の子供すらまだ歯科に内科にと苦しんでいるのに、他の多くの会員の子供等は一体どうしているのだろうか。あきらめて出て来ないのだろうか。どんなに育っているのかしらと心配し、心当たりの人を会へ連れて来る努力をしようと相談した。三氏は「守る会だけが私等の頼りじゃ。親類や云うてもヒソミルクの事は何もかも分かってもらえんからねえ。身内で云えん事でも岡崎さん方では安心して云える。この集会に来る時は何もかもほっとして来るんやけん。たった四人になっても会だけはつぶせん。岡崎さん頼みます」と三氏を乗せた「守る会丸」は主人を船長に、頼る島も無く掛声を出し合い海原をこいでいる姿であった。

昭和三十八年十月二十六日朝、朝日新聞第一面に森永無罪判決の大々的な記事を見た。徳島裁判所は、事件当時の徳島工場長と製造課長が業務上過失致死罪で起訴されていたのを無罪判決にしたのだ。主人は新聞を見るなり「無罪にしゃがったな！ 許せん！」とつぶやいたまま食事中記事を読み続けたが「これで岡山の民事訴訟も駄目だな。許せん」と又吐き捨てるように云って出勤した。私はそっと新聞を見た。「とうとう国の裁判も無罪か」とガックリ来た。夕刻勤務から帰った主人は、いつもなら賑やかな夕食時に一言もいわずに朝刊を読み返し、食事をすますとすぐさま机に向った。「お父さんどうするの？」と尋ねた私に「無罪は許せん！ 裁判長

に正しい現状を訴えるんだ」と云って複写用紙を取り出すと猛烈に書き出した。私は、同盟結成の時と少しも変らぬ主人を見た。また、それは大きな岩山にすべりながらよじ登る、か細い人影のようにも見えた。私はつい口に出した。「お父さん、国の裁判が無罪と決めた以上もうどうにもなりませんまい。昔の役員もちりぢり、誰一人協力してくれない。会員すら集まらない。世間は物好き、金日当てという中で貴方一人頑張ってみても、国と森永相手じゃ何程の事が出来るでしょう」と弱音を吐いた。

主人は、「今日までやって来て今更何を云う。だまって居れ。現に苦しんでいる子が多くいるではないか。森永ミルクの後遺症があるではないか。それに無罪。こんなバカな事があるか。あらゆる限りの訴えをし今迄のデータを出して裁判をやり直させるのだ。国家権力といえども、正しい事を正しいというたった一人の人間もいなくなれば、又第二次大戦時のような暗黒時代に舞い戻りだ。たった一人でも僕はやる。つべこべ云うな！」

一喝されて私は言葉無く苦しい戦時中と砒素ミルクの缶が頭よみがえった。執念と理想と信念に燃えた主人の横顔を見て、この人は死ぬまで砒素中毒事件を手放さないであろう、主人が正しいのだ。私は主人を助けて共に歩まねばならない。と自分を恥じ、かっ心に決めた。

翌三十九年四月二十三日、岡山の民事訴訟も全員取り下げた。示談金はたった三万円であったという。

昭和三十九年八月二十三日、第九回守る会総会に親子十四人が集まった。この頃、会社との交渉も一方的に拒否され、徳島裁判は無罪、岡山の訴訟は取り下げ、守る会の組織を守って活動しようとする意識のある者はほんの僅かとなった。守る会の暗闇のどん底時代であった。主人はこのような時こそ散りぢりになっている会員に呼びかけ、被害者の状態や親の気持ちを聞いて、守る会の今後の方針

を決める為、十周年記念集会を開こうと提案した。皆は、子供達も手伝い位は出来るようになったから家族総動員して助け合ってやってみようと決議した。

昭和四十年に入って十周年集会の用意にかかった。守る会発足時の会員二百三十人に対しアンケートと開催通知状を發した。森永社員や県衛生部の出席も依頼した。

同年八月二十二日、岡山市春日町労働会館で守る会第十回総会、「砒素ミルク中毒十周年記念集会」を開いた。早朝より岡崎・岩月・吉房・浅野各夫妻は、被害児やその兄弟までをつれて来た。一家総動員で机、椅子を運び会場や受付を作り、スローガンを張り、湯茶の用意、資料配布と、十年間守る会で共に活動したこの四家族は、主人の差図で何をするにも意気投合よく動いたものだ。子供達は受付とお茶係りを引き受けよく手伝った。森永は、守る会が解散することを期待して解散記念品を持参し参加した。

定刻前より次々と入場して来る子供達の姿は、年齢より身長もずっと小さく、弱々しく曲った背骨、細い手足、うつろな眼、どす黒い皮膚、どの子も一様にいたましかった。また、子供達の手を引く親達の淋しげな、あきらめた表情から察し、私は「これこそ九十年の歳月が作りあげた砒素ミルク後遺症の悲惨な集会だ。そして、守る会は絶対続くであろう」と思った。これらの姿は私に想像以上のショックを与えた。

親達は次々に我が子の異常を訴えた。南常子氏は「健康児と比較して調査してほしい」と発言され、皆が検診・治療を求めた。主人はこれらの要求を十周年記念集会決議と声明書にまとめ浅野氏が朗読した。集会が済み会員、森永社員等が私宅に落ち着いた時、森永の磯部課長が「解散になるというお話がまるで反対になってしまった」と頭をかかえたが私はお茶を進めながら「仕方ないですよ。会社が砒素をのまして十年も放とくんですから……子供の体は正直で

すよ。」と返したら皆無言になってしまった。

私達は、この集会に各マスコミが来ていたからどのように取り上げるか期待していた。NHKと中国新聞のみが後遺症の疑いをわずか報道しただけで、反響もなく森永や県当局は集会の要求にも知らんぷりであった。痛ましい子供達はまたしても無視されてしまった。しかし主人は中国新聞のたった一つの記事を丁寧にスクラップし、スライド写真にも収めた。そしてまた、この集会結果を文書にして徳島検察庁や各方面に訴えた。

この年の秋、東京のジャーナリストの平沢正夫先生は著書「あざらしっ子」を出され、サリドマイド禍の子供達の苦しみを知った。そしてサリドマイド禍に全く関係の無い第三者の先生が正義の筆を振って立派な本を出して世に問われ、世論がサリドマイドの子に集中し、森永の子供達が見捨てられているのを、羨ましく悲しく思った。主人は今後は森永・サリドマイド等他の公害被害者団体が手を結んで行かねばならぬという考えをもっていたので、文書連絡をしたり、サリドマイドの中森怜悟氏をはじめ、他団体代表者が我が家に見えたり主人が出向いたりしていた。そして平沢正夫先生に「事件史」を送り、サリドマイド被害児と同じように森永ミルク中毒の子達がいまだ苦しんでいる。「あざらしっ子」を書かれたように森永ミルク事件のことを書いて世に問うて頂き度いとお願ひした。

昭和四十一年三月三十一日、高松高等裁判所は徳島地裁の判決「森永無罪」を破棄、差し戻した。

この年の四月二十日には、会員の吉房亀子氏の御好意により家族中、作東町土居の吉房家へ招かれた。「岡崎さんに一度この空気の良い田舎の我家でのんびりしていただきたいと思っていた。わらび取りやよもぎつみをして下され。山羊乳の蒸しまんじゅうを食べ下され。たまには遊んで頭を休めて下され」と心暖まる款待を受けこのような同志の情で、団結をますます固めた。

この年の五・六月頃、あざらしっ子著者平沢正夫先生と松浦総三先生方が森永ミルク事件を取材に来られるとの連絡があった。見捨てられたミルク中毒の取材に東京の先生方がわざわざ岡山へ来て下さる。神様のお使いが来られたかの思いで先生方をお迎えし、夜更けまで森永被害児達の惨状を訴えた。先生方は精力的に各地に廻って取材され帰京された。主人は「『女性自身』に記事が出るらしいからたくさん買って置く積りだ」といい、私は楽しみに待ちこがれていた。記事は出なかった。理由は森永が雑誌社に広告料の圧力をかけたと後に聞かされ、事件圧殺の正体を見せつけられた。先生方も残念がられた事と思った。

昭和四十一年八月二十一日、守る会第十一回総会では昨年の十周年記念集会で守る会の活動を知り救いを求めて新会員が参加した。

新入会員は、守る会の治療活動で重症者が軽くなったのを知り、驚き、今まで一人で苦しみ続け、子供をかかえ悲痛な思いをした事を語り一緒に頑張りたいから頼むと申された。

主人は「過去十一年間守る会に集まった者はどんな困難にあってもあきらめなかった。お陰で重症の子も致命的な後遺症からは守られた。十周年記念集会の結果で会が今まで訴え行動して来た事が正しかったと証明された。これから新しい顔ぶれが増えたとし、どうしたら子供が救えるか積極的に考えてゆこう。」と皆を励ました。

岩月氏は「その通り、私は十年戦争を宣言したがアッと云う間に過ぎた。十周年の集会に来た子はどの子も可愛想なもんじゃ。こうなった以上もう絶対二十年戦争じゃ。森永よ思い知れ！ わし等百姓はくわ一丁、肥たご一丁あれば食うていくわい。銭はいらんぞな。子供の体を元に返してくれりゃあいんだ。」といい、吉房夫人も「そうじゃ。この思いが通らねば死んでも死に切れんですぞな。」といった。

主人は「金も見栄もいらん。親の愛情ほど強いものはない。とに

かく世間は冷たいが、やる気のない森永や県当局は相手にせず、守る会独自で検診をする事を考えよう。」という、皆深くうなずき、行動する事があつたらすぐ知らせてくれと云って家路についた。「この世に本当に神様が居られるのなら、どうかこの人達を見捨てないで下さい。」私は祈る気持で皆の後姿を見送り会場の掃除をした。

さて、娘は、小さい時から水に親しませていたお陰で、水泳のクロールが得意で、小学校の高学年になってから、急に背が伸びた。専ら自分で自覚して体を鍛える子になっていた。私はエキスパンダーを与えて娘だけは母乳のよく出る乳房になる様胸の運動や乳房をもむことをさせた。今が最後の体作りの時と思ったから、お八つも甘い物をさけ専ら手作りのパンやおにぎりにのりを巻いて天ぶらを添えたり、たまに甘い物の時はその横に小魚を添えたりした。高級な甘いケーキ等買った事が無い。守る会の集会には一回も欠かさず参加させ、親の苦労話や重症の子達の苦しむ姿を見聞きさせて来た。

主人も私もこの事件については、すべての事を子供に話し聞かせ私は毒ミルクをのませた親の責任を果す為に闘かっている事を理解してもらった。そして守る会の役員の娘は、砒素ミルクを飲んだ事をかくしてお嫁にゆく事は出来ない、幸い軽くてここまで大きくなったのだからせめて自ら体を鍛え、勉強に励み、役立つ人間になるように教えた。娘も素直に教えを守り主人のかなり厳しい勉強指導にも耐え、小学校の卒業式には、卒業生総代に選ばれた。中学一年生になったとき、主人は著書「森永ミルク事件史」を娘に贈った。娘は一生懸命読んでいた。

その年十一月二十六日、遠迫克美先生や主人等が協力して結成された「葉害対策協議会」の創立総会が岡山県農業会館で開かれ、守る会会員も参加した。会長遠迫克美先生、講師大平昌彦岡大教授、

議長を主人が務めた。この会はサリドマイド児、森永ミルク中毒被害者の救済を主に活動した。南早百合ちゃんの亡きおじい様も熱心に訴えられた。又幼い娘達も受付を手伝い、サリドマイド児救済のバッジ売りをした。

会長の遠迫先生は熱心なクリスチャンで、被害児達を何とか救わねばと奔走され、昭和四十二年になって、守る会悲願の精密検診を水島協同病院で受けられるようにお世話くださった。協同病院では病院初の砒素中毒検診で、精密と時間を要するため土曜の午後から夜まで病院中が協力され、三月頃から九月末までに三回に分けて三十五名が受けた。費用も会員の窮状を配慮して、当時千円程の負担でして下さった。主人は病院と連絡を取りながら、会員を検診に行かせ、私も娘を連れて第二次検診に行った。実に十二年間医療から見捨てられた暗黒時代の、被害者の立場に立ったこの検診を私と娘は心から感謝の気持ちで受けた。検査室から検査室へ移動すること出入口で最敬礼をしたものである。

この検診結果が手に届いた時、主人は「これが森永砒素中毒の後遺症でなくてなんだというんだ」と吐き捨てるように云った。私も何回も見直した。皮膚・眼・耳・歯・肝臓・腎臓・知能・発育・骨・血液等にみな異常があり、一人の子供が必ず何か所かの病気を持っていた。可愛そうに何とかならないものかと主人と歯ガミした。内臓に異常なしは娘の外に一人、たった二人だけであった。この年の八月二十日の第十二回守る会総会では、検診の進行と健康管理の件を中心に、翌四十三年八月二十五日の第十三回守る会総会では完了した検診結果と今後の展望を中心に討議した。

「砒素中毒の後遺症については、毒をのんだ赤ん坊の時からずっと看病して来た私達母親の方が、大病院の森永御用医者よりよく知っているんだ。後遺症は無いなどと云って来た森永や、手先のやぶ医者者に水島協同病院の検診データを見せてやりたいわ」と、母親達は

くやしがあった。主人は「孤立している被害者が一人でも多く守る会へ参加するように努力すること。決してあきらめない事」を説いた。

昭和四十四年初夏の頃と思う。久しく音沙汰も無かった森永乳業本社の磯部氏が突然守る会本部の我が家を訪れた。簡単な挨拶だけして帰り私は何の為の訪問か意味がさっぱり分からなかった。今から思えば薬対協の動き、水島協同病院の守る会の精密検診、それに伴う協力医療陣や大阪大学衛生学教室の動きを知った森永が、守る会本部の内情をさぐりに来たのだろう。

昭和四十四年八月二十四日は守る会第十四回総会であった。この年も又新しい会員が参加した。中学二年になった被害者本人も参加した。そして各地に埋もれ苦しんでいる被害者の情報を交換した。

主人は「水島協同病院で守る会会員が受けた精密検診のデータが後遺症を裏付けるものであること。今日までの守る会の信条は正しく間違いなかったこと。それ故に岡山医大衛生学教室から協力の申し入れがあったし、大阪大学医学部の方にもそのような動きがある。守る会の十四年間の暗闇の闘いと、今まで空しかった努力は、近い将来決して無にはならないだろう。世の中の情勢は少しずつ変化している。金を目的とせず毒ミルクをのませた親の責任感と愛情から叫ばれた、子供を元に返せとの私達の叫びは全被害者の叫びとなつて爆発するだろう。その時こそ、岡山の守る会は全国の被害者の中心となり先頭に立って闘って行こう」と挨拶し激励した。

私は今迄に無く明るい期待に満ちた主人の言葉を、その時期到来はいつの事かと遠い夢を見るような思いで聞いた。然し一筋の希望が見えて来たのだ。皆は「機会が来たら必ず闘おう」と固く決意した。吉房氏は、「その時が来たら一番に知らせして下さい。岡山へ飛んで来る。子供の為に必らずやりますよ。岡崎さん頼みますよ。」と眼を光らせて云った。